

## 創作ダンスの授業から更に視野を広げて・・・アーティストによる芸術表現体験

### 「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」ワークショップ報告

都立広尾高校 君和田雅子(保健体育科教諭 全国ダンス・表現運動授業研究会)

#### はじめに

都立広尾高校では、創作ダンスの授業を2年生女子に行っている。一学期は初めての創作ダンス単元、二学期は少し進んだ単元ととらえ、一時間完結の課題解決型グループ学習を積み重ね、クラス内でグループ創作の授業内発表会を行ってまとめとしている。

今年度は「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」(文部科学省)を本校で実施できるチャンスを得、通常の1, 2学期のダンス単元終了後にコンテンポラリー・ダンスのアーティストによる芸術表現体験の授業を3時間計画、実施した。

#### メールマガジン続き

それまでの授業で自分たちのオリジナルの表現を仲間と協力して創り出す楽しさ、喜びに目覚めた後、じかに触れるアーティストとのワークショップでどう深まり、変化していくか。身体表現が芸術に結びついていくことへの気づき、ダンス観のひろがりはどうなるか。

今回は、宮崎県を中心に活動している「んまつー波斯」の3名のアーティスト、児玉孝文さん、みのわそうへいさん、豊福彬文さんに指導していただいた。

〈んまつー波斯〉の児玉孝文、みのわそうへい、豊福彬文は、競技者として育った。宮崎大学でコンテンポラリー・ダンスに出会い、競うために鍛えられた身体を芸術表現として魅せることに魅せられる。

スポーツと芸術の境界域をフィールドとし、そこを徘徊することで、活動の範囲である境界域を確実に拡大していく。その行為こそが〈んまつー波斯〉のダンスである。(んまつー波斯 facebook プロフィールより)

「んまつー波斯」の表現はいわゆるダンス的というより、日常の動きやスポーツの動作などから独自の表現を創り上げ、作品を発表している。

ダンスの授業で常々、「既成のダンスにとらわれず自分たちのオリジナルの表現をどうみつけるか」と伝えてきたことが、実際に芸術に昇華するその過程をじかに体験できるまたとないチャンスであると考えた。

#### ワークショップの様子

##### 第一回「夜の動物園」

有名なダンス作品の印象的なポーズを写し取ったスチール写真3枚を基に、ポーズとその間の動きをグループで考え、お互いにアイデアを交換し合って「夜の動物園」のテーマで即興創作し、発表。



写真1「夜の動物園」

有名な舞踊作品の印象的なポーズの写真をグループで形作る。  
四種類の写真を、それぞれリーダーが指図しながら模倣し、配置を工夫したり形を工夫する。他のグループとお互いに見せ合い、発表。

写真2「夜の動物園」

4つの組ポーズの間の動きをそれぞれ工夫して、ポーズをつなげる。「夜の動物園」のイメージで、それぞれのグループのオリジナルの動きと、4つのポーズとで小作品をつくり、見せ合い、発表。

第二回「ずんずん」 擬態語、擬音語からグループで即興的に動きを発見し、一流れの動きを創作しお互いに発表。グループ間のコミュニケーションを取り合い、イメージや動きを交換してグループ作品をより深めた。



写真3、4「ずんずん」

ちくり、ずん、まん、どすん、しゃきつなどの擬態語、擬音語から即興的にいろいろな動きを探す。カードに記された擬態語・擬音語をグループにひとつずつ渡し、グループで相談しながら感じをとらえた動きを見つける。みつけた動きをグループごとに交換し、つなげてひと流れの小作品づくり。クラスみんなで発表。

第三回「めいれいどおりにすすめ！」体育の「集団行動」をヒントに、柔軟な発想でさまざまな動きのことばをお互いに出し合い、つなげて小作品をつくり、発表。



写真5, 6 「めいれいどおりにすすめ！」

「匍匐前進」「高い木に登れ!」「笑いながらダッシュ」「お風呂にゆっくりつかる」などいろいろな楽しい動作をグループ内でお互いに考えて命令しあう。発想を豊かに、面白い動きをつなげ、グループごとに発表。

### ワークショップを終えて

既に体育のダンスの授業で、「仲間と創る面白さ」「認め合う楽しさ」を学んだ生徒たちにとって今回一番の収穫は、毎回、アーティストの作品を生で鑑賞し、自分たちでその作品の創作過程をたどりながら創り上げていく体験そのものであったようだ。毎回の感想から「何気ない動きがダンスになるってすごい」「こうして作品は創られていくというのがよくわかった」といった、アーティストのパフォーマンス鑑賞からの気づきが続いてきた。

このワークショップのねらい「グループ単位で、協働して、正解のない課題に創造的、創作的に取り組む活動」が、まさに芸術を生み出す活動そのものであることに気がついたのではないかなと思う。

そのほか、「グループごとにいろいろ個性があってよかった」「毎回の課題が新鮮だった。こんなことからダンスが生まれてびっくり!」「コンテンポラリー・ダンスはリズムとかを超えて、自分の気持ちや自然のものや音を表現しやすいと思った」「ダンスがスポーツだと思った」「みんなでひとつのポーズを間を感じながらやるのはとても楽しい」「他のグループのダンスも面白く、いろいろな工夫がたくさんあって、ダンスの幅はとても広く、尽きることがないと感じた。」など、さまざまな気づき、非常に肯定的かつ前向きな感想が多くみられた。

宮崎と東京の距離を超え、とても充実したすばらしい体験であったと思っている。

遠路はるばるエネルギッシュにワークショップを展開してくださった「んまつーポス」のみなさん、宮崎大学の高橋るみ子先生、改めてお礼を申し上げたい。「ありがとうございました。」







資料、写真提供 んまつーポス